

峰 万里恵 (うた) 高場 将美 (ギター)

1ª parte

1. ファド・モウラリア “わたしは歌を追っかけてました”

Fado Mouraria “Corria atrás das cantigas”

詞 & 曲：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*

アマーリアさんが歌手としてデビューしたころ（19才？）つくった曲です。最初は作者不明の、聞き覚えた歌詞ということにしていたそうです。曲は19世紀から伝わる《モウラリアのファド》というメロディ・パターンを利用しています。モウラリアは、リスボンの地区のひとつで、その酒場は最初にファドがうたわれた場所のひとつです。

わたしは人生に、うたいながら入ってきた。そして歌われたわたしの嘆きは、泣きながら行ってしまった。そのあとには人の思いを感じる心といっしょに。

ほかの女の子たちと通りで遊びながら、わたしは街の歌の

ひびきに乗って走っていた。止まるのは、ただうたうためだけ。

やがてようやく大人の女性になったころ、わたしは最初の愛を歌った。そしてまた、ひとりであつた、わたしの最初の痛みを。

わたしは人生を過ごしてきた。うれしくても悲しくても、泣きながら。わたしの《ファド》は移ろいやすかった。でもいつもあつたのは、わたしがうたうこと。

*《ファド》ということばは、歌のジャンル名であるほかに、宿命・運命の意味を持っています。

2. アイ・モウラリア *Aj, Mouraria*

詞：アマデーウ・ド・ヴァル *Amadeu do Vale*; 曲：フレデリコ・ヴァレーリオ *Frederico Valério*

アマーリアさんが25才で初めて一座をひきいて（！）ブラジル公演をしたときの大ヒット曲です。レビュー劇場の音楽監督（ピアニスト）として大活躍のヴァレーリオが作曲。作詞したのは台本作家です。

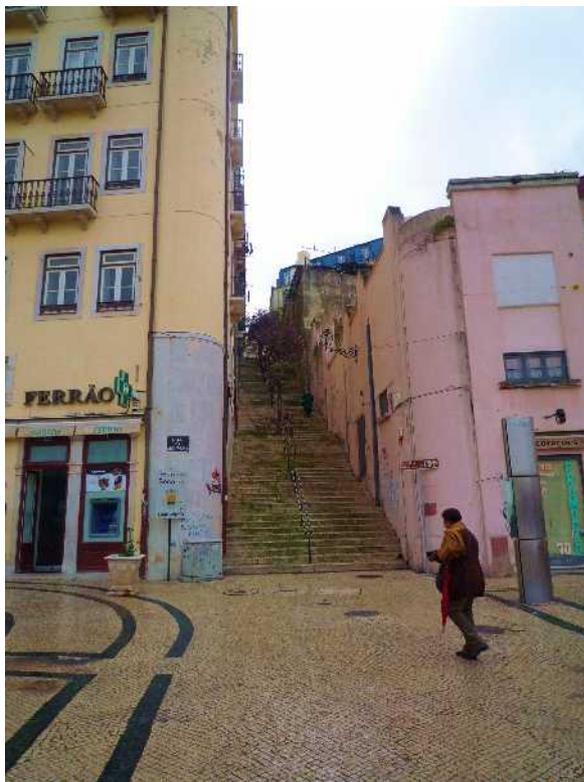
アイ、モウラリア——古いパルマ通りのある町。ある日わたしは魂をとりこにされて、そこへ置いて来た。それは、ちょうどわたしのそばを、とあるファディシュタ（ファドをうたうやくざもの）が通り過ぎたから。その男の肌の色は黒く、口は小さく、人をからかうような目つき。

アイ、モウラリア——わたしを魔法にかけた男の町。彼はわたしに嘘をついていた。でもわたしは崇拜するほど愛してしまった。その愛を風が、哀歌のように、いっしょに持って行った。でも今でもなお、そしていつでも、わたしはその愛をいっしょに連れている。

アイ、モウラリア——貧しい家の軒先でナイチンゲールが鳴く町。酒場の女たちのピンクのドレスの町、昔ながらの物売りの声の町。

アイ、モウラリア——聖体行列が通ってゆく町。ア・セヴェーラの声が、ギターラのなかですすり泣いている町。

*ア・セヴェーラは、19世紀のなかばにモウラリアに住んでいた有名な娼婦で、ファドの最高の歌手のひとりでした。



現在のモウラリア
(この階段を上ったところの町)

Foto: ©2009 Marie Mine

3. にかいアーモンド *Amêndoa amarga*

詩：アリ・ドス・サントシュ *Ary dos Santos* 曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

作曲者はリスボン郊外に生まれ育ったフランス人で、1960年代から、アマリアさんのために、新鮮で豊かなメロディのファドをたくさんつくりました。これはポルトガルの代表的な現代詩人のひとり（ファドの作詞も多かった）の詩への作曲です。オウルマンは常に詩からインスピレーションを受けて作曲しました。

わたしは、あなたのために話す。そしてだれもそう思わない。でもわたしは言う——わたしのアーモンド、わたしの友、わたしのきょうだい、わたしの愛情の群れ、わたしの家、わ

たしのなにもない庭、わたしのつばさ。

わたしは、あなたのために生きる。そしてだれもそう思わない。でもわたしはたどる、とある木いちごとナルド（白い小さな花）の道を。わたしが追い求める、ひとつの濃い愛情……まわりちゅうをアザミに囲まれて。

わたしは、あなたのために死ぬ。そしてだれもそれを知らない。でもわたしは待っている、夜明け前の味がするあなたのからだを、絶望の味がするあなたのからだを。おお、わたしのにかい、わたしの欲しいアーモンド。

4. 素朴な人たちのクリスマス *Natal dos simples*

詞&曲：ゼカ・アフォンソ *Zeca Afonso*

作者（1929～87）は、いわゆる社会派のシンガー・ソングライターで、特定の政党には入らず、ポルトガル独裁政権への反抗をつらぬきとおしました。1950年代末から活動をはじめ、しばしば投獄され、拷問を受けましたが、節を曲げずに訴えつづけました。74年の無血クーデターは、彼の曲がラジオで流れるのを合図にはじまりました。

ジャネイラシュ（新年の歌）をうたおう、そこの庭の中まで入っていこう。わたしたち、ひとりものの女の子たち。

オルヴァリャーダ（夜露の歌）をうたおう、そこの庭の中まで入っていこう。わたしたち、結婚している女の子たち。

風がまわり、運が変わる。あの失われたオリーヴ林を通して、北風は行ってしまった。

たくさん雪が山並みに降っている。古い道たちのことを覚えているのは、土地へのサウダードをもっている人だけ。

火のついたランプを持っているのは誰？ ラバナードとパンと新しいワインは？ 飢えが貧しさを殺していた。

もうわたしたちは、この長い道のりに疲れた。古い道たちのことを覚えているのは、運まかせで夜を歩く人だけ。

古い道たちのことを覚えているのは、運まかせで夜を歩く人だけ。もうわたしはこの長い道のりに疲れた……

*ラバナードは、スライスしたパンに砂糖水か牛乳をしみこませ、溶き卵をつけて油で揚げたものです。

サウダードは、しばしば郷愁と訳されますが、それだけではなく、ここにはないものを懐かしむ、愛情に満ちた悲しい感情です。

5. 通りの名前 *Nome de rua*

詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ *David Mourão-Ferreira* 曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

作詞者は、現代ポルトガル文学を代表する詩人・小説家でしたが、この曲ははじめからファドの歌詞として書いたようです。

あなたはわたしをリスボンの通りの名前と呼んだ。人の名前というよりも、よくボートの名前にされるような、通りの名前。

街から出てゆくときのような、にかい気持ちを少しこめ

て、なにかを探し求めている人のくるしげな顔つきと、許してくれるほほえみとともに、あなたはわたしに、リスボンのとある通りの名前をくれた。

静かな通りの名前。夜はだれも、そこを通らない。そこでは嫉妬が目印の矢印、愛が目指す家。

秘密の通りの名前。夜はだれも、そこを通らない。そこでは、あの詩人の影が、とつぜんわたしたちを抱きしめる。

6. ファド・ポルトゥゲーシュ（ポルトガルのファド） *Fado português*

詞：ジョゼ・レジオ *José Régio* 曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

作詞者は、やはり文学者です。

ファドが生まれたその日、風は落ち着きなく、あちこち揺れていた。空が海を押し広げていった、とある帆船の甲板の先のところまで、とある船乗りの胸のところまで。男は悲しみの中でうたっていた。

「ああ、なんとという美しさだったろう！ わたしの道、わたしの山、わたしの谷、茂る木の葉、花たち、黄金の果物。

スペインの陸が、ポルトガルの砂が見えるか？ 涙にかすれたわたしのまなざし。

母よ、さようなら。さようなら、マリーア。わたしが教会で誓ったことを、体にしみこませて覚えておいておくれ。いま神様は、わたしを海に埋葬しようとしている」

頼りない帆船で大海を行く、とある船乗りの口に、痛ましい歌が死んでゆく。そのくちびるが、いまキスするのは空気だけ。

2ª parte

1. にかいクリスマス *Amarga Navidad*

詞 & 曲：ホセ・アルフレード・ヒメーネス José Alfredo Jiménez

メキシコから、別れのさまざまな感情を表現させたら世界一の(?)ホセ・アルフレードの曲です。

きっぱりと終わらせなさい、ただの一撃で。どうしてあなたはわたしを少しずつ殺そうとするんですか? あなたがわたしを見捨てる日がやってくるのなら、心のひと、わたしはそれが今夜のほうがいい。

そしてもう、たくさんの方が過ぎた後に、あなたが後

悔しっていて、とても不安になっているとき、あなたは知るでしょう——あなたが置いてきたあのものが、あなたがいちばん愛していたものだったと。でももう、どうしようもないのだと。

12月というのが気に入りました、あなたが去っていくために、ちょうどいい。あなたの冷酷なさようなら、わたしのクリスマスになるように。

わたしは始めたくない、新年を、この同じ愛とともに、わたしをこんなに苦しめる愛とともに。

2. 生まれたばかりの幼子に栄光あれ *Gloria al recién nacido*

アンダルシア地方(スペイン) 伝承曲 編：エル・ニーニョ・グローリア *El Niño Gloria*

スペインの昔ながらのクリスマス民謡。フラメンコの歌い手ですが、この曲で最高の人気者になった(芸名もこの歌詞から付いた)エル・ニーニョ・グローリアのアレンジを拝借しました。彼のリズムはヘレスのブレリアアですが、それは追究しませんでした。

さて赤ちゃんは、泣いてるともっと美しく見えた。その目の涙は真珠になった、栄光を! その祝福された母親に勝利! 生まれたばかりの幼子に栄光!

聖処女は、ゆりかごの子が着るものを縫っていた。明る

い月の光線でおむつを編んでいた。喜び、喜び! ベツレヘムに生まれた、1輪のバラから、このカーネーションが。

聖処女はお乳を上げていた、子どもはニコニコ笑った。聖ヨセフは、いいおじさん。子どもの可愛さにヨダレをたらしてた。栄光を!

つばめ、つばめ、どこに巣を作った? このベツレヘムの軒先に、その花咲くバラの木のそばに。喜び、喜び! ベツレヘムに生まれた、1輪のバラから、このカーネーションが。

3. アヴェ・マリーア・ファディーシュタ *Avé Maria fadista*

詞：ガブリエーウ・ド・オリヴェイラ *Gabriel de Oliveira*

曲：フランシーシュコ・ヴィアーナ *Francisco Viana*

作詞者(1953年、62才で没)は、第一次世界大戦で、ポルトガル海軍で功労があったとのこと。その後、お役人しながら、ファドの歌詞をたくさんつくりました。とくに民衆の信仰心をうたった曲で有名です。このメロディは、古い長調のファドにもとづいています。

神聖なマリアに讃えあれ。気高い美しさへの、この、あまりにも小さな祈りの歌。

すべての女性のうち、もっとも祝福されたお方、あなたはイエスを身ごもられた、愛とかぎりない恩寵のもとに。

痛みの聖母マリア様、ファドをうたい弾くことが罪ならば、わたしたち罪びとのためにお祈りください。

ファドをうたうものはだれも、運に恵まれないものばかりです。わたしたちのためにお祈りください、母なる処女よ。今も、いつも、そしてまた、わたしたちの死の時にも。

4. 割れた鏡 *Espelho quebrado*

詞：ダヴィッド・モウラオン=フェレイラ *David Mourão-Ferreira* 曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

これは、最初は(歌詞ではなく)詩として書かれたようです。

風は、その鞭で湖の鏡を割る。わたしのなかで受けた傷は、もっと激しかった。なぜなら風は通り過ぎてゆくとき、あなたの名前をささやいていったから。それをささやいたあとで、わたしを置いていったから。

あまり速く通り過ぎたので、わたしの悩みを破壊することもできなかった。その悩みの中では、わたしはこんなに

しっかり、変わらずにいる。でも風の通過は、ガラスの面にして刻んでいった、湖に、わたしの奴隷女のイメージを。

おお、あなたのないわたしの両目の、クリスタルの液体よ。むなしく嵐にわたしは頼んだ、わたしを喪に服させる鏡が壊れるようにと。わたしの顔が、涙のない乾いたものになるようにと。

……アイ、あなたのないわたしの両目……あなたのない……わたしのなかでは、もっと激しかった、風が。

5. ラグリマ（涙） *Lágrima*

詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*; 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

全曲アマーリアさんが書いた歌詞による2枚めのアルバム（1983年）のタイトル曲でした。たいへんつらい気持ちの中で書かれた詩なのでしょうが（多くの場合、1日に2行、また数日して2～3行と、断続的に書かれていったようです）、これを歌って聴いてもらおうという思いが、彼女が健康を回復するエネルギーになったようです。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは

刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

6. ロス・ペーセス（魚たち） *Los peces*

ヒターノのクリスマス民謡だと思っていましたが、キューバなどラテンアメリカ各地でも、たいへんポピュラーだそうです。

聖処女は髪をとかしてる、カーテンとカーテンのあいだで。髪の毛は金、櫛は高貴な銀でできている。

聖処女は洗ってる、それからロメーロの木に乾してる。小鳥たちは歌ってる。ロメーロの木に花が咲く。

アンダルシア地方（スペイン） 伝承曲

聖処女の清らかな衣の胸明きには、バラの花。それは聖ヨセフがくれたもの、クリスマスイヴに。

飲んでる、飲んでる、川の魚たち。なんとよく飲む。神様が生まれたのを見て。

*ロメーロ（英語ローズマリー）は、スペインでいちばんよく使われるハーブのひとつですが、「巡礼の木」という意味です。マリア様たちのさすらいのとき、道案内をした木だと伝えられています。

お聴きいただき、ありがとうございました。
またお会いできるのを楽しみにしております。
良いクリスマスを！

選曲・構成：峰 万里恵／プログラム制作：高場 将美
<http://mariemine.web.fc2.com>



セビージャにて
Foto: ©2009 Marie Mine